

# グループワークの実践と成果

## 母親教室と不登校のその後

5 0 1 1 神木亜美

5 1 6 1 中嶋靖子

5 5 1 3 三嶋陽介

---

### ◇序論

I [不登校研究の理由](#)

II [母親教室について](#)

### ◇[方法・対象](#)

### ◇結果

I [単純集計](#)

II コレスポネンス分析

II-I [選択項目について](#)

II-II [自由記述について](#)

### ◇[考察](#)

### ◇[課題](#)

### ◇[参考文献](#)

付録1 [質問紙](#)

付録2 [カテゴリー表](#)

付録3 [回答結果 \(選択項目\)](#)

付録4 コレスポネンス分析結果 (選択項目) [1](#)

付録5 [回答結果 \(自由記述\)](#)

付録6 コレスポネンス分析結果 (自由記述) [1](#)

[2](#)

[2](#)

## I 不登校研究の理由

登校拒否・不登校問題は今さら話題になったわけではない。これまでも数知れない論文が発表され、新刊本も次々に出てくる。しかし、解決の兆しは見られず、問題・課題は底をつかない。研究者側に求められる姿勢としては、各専門家間の提言、研究をネットワーク型へと移行させるべきであるという意見が最近によく聞かれる。これまでは各者各様の思想があり、それが新刊として世に出てきた。民主主義では言論の自由・出版の自由が当然であるが、登校拒否・不登校問題に直面している保護者・教育関係者を困惑・対立させてはいないだろうか。これまで研究には精神医学者・臨床心理学者・教育学者・施設の専門家等によって様々な報告がなされ、また、クライアントの事情も人それぞれなために、事例の数は事欠くことがない。にもかかわらず、問題が激増し続け、社会問題化するにまで至っている理由は、研究による実証的な結果と考察が統一されておらず、ばらばらの状態で生かされたことで、研究成果が社会へ還元し切れていないからではないだろうか。だからこそ各専門家間のネットワーク型協力体制へと協力システムの進化が望まれているように感じられる。私たちが卒業論文として取り組んだ神戸市中央児童相談所・不登校児を持つ母親グループ（以下より母親教室とする）の追跡調査では官と学の共同作業であり、長期的政策のもとで新たな効果が期待できるアプローチを探り出すために予後データを蓄積してゆく一環を担うものであった。一つの解決策が即効性を持つほどに、この問題は単純でない。減少傾向すら見えないが、複雑な社会問題となり、学校制度そのものの価値を問いかけている登校拒否・不登校問題は、経験した者とそうでない者の人生・周囲の環境を長期間にわたって比較・検討することで、彼等と社会の間に生じた歪み・社会システム・制度の変更が求められる問題点を伝えてくれるであろう。その点で、この研究は意義があり、今後も同様の試みは必要だと思われる。

現在の不登校には様々な症状や状態像が含まれ、そこには神経症的な葛藤だけではなく、学校へ行ってない子供達を全体的にまとめて考えていこうとする背景が反映されている。日本の不登校問題は、敗戦後の社会変動でもたらされた、システムそのものと価値観の激変に関連があるとする意見のなかで、時代と社会の発達に合わせて「学校恐怖症」－「登校拒否」－「不登校」と言葉も変わってきた点は原因論を模索する上で大変興味深い。

この卒業論文は、母親教室参加者へのアンケート調査の分析より、不登校児を持つ家族の対策を検討する者になるので、不登校発生の原因・責任を考察することが主な目的ではない。しかし、背景・原因を考えることで、現在の課題を認識し、現代の特徴を捉えることと、課題解決へのアプローチが可能になると思われることから、本論と違った方向へ行かないよう注意しつつ、日本における不登校現象の特徴・その意味するものを考えてみたい。この卒業論文に取り組むことが、単なる不登校への対処療法を示すものにとどまることなく、その根源を推測し、断ち切るための手段を養うきっかけにしたいからである。

## II 母親教室について

専門的な治療者との個別的な接触も回復には必要となるが、日常生活での行動や考え方の変化を達成するには同じ体験を持った仲間と出会うことも意味がある。グループの進捗とともに参加者に気づきや内省が起こり、同じ体験を持った仲間と共感されているという安心の中で、生き方に変化を実感するような期待がグループの結成に込められているからである。必要なときには存在しており、自分を受け入れてくれるものがグループになる。そして、メンバー達は同じ体験を共有する仲間として一人一人に温かい姿勢を示してくれるだろう。こうした人間関係は子どもの不登校で困惑・混乱した状態にある母親に安心感を与えてくれる。事実、今回の調査で自由記述の部分に「母親教室に参加したおかげで、悩んでいるのが自分一人ではないと分かった」という主旨の記述を調査対象者の62%の者がしている。これは、質問項目にカテゴリとして明文化されていたものではなく、自由記述である点を考慮すると、かなり高い数値である。この結果からも、実際にグループが1対1のケースでは生み出せない効果を持っており、グループワークとして母親に働きかけるものが多いことを示している。グループへの参加に初めから信頼して身を寄せるわけにもいかないだろうが、試行錯誤を繰り返し、回数を重ねるうちに自分へ用意された場所があると思えるようになるのではないだろうか。そこで経験される現象はすべての参加者に同一で起こるのではなく、時期、内容ともに個人差がある。自分を責めること・一人のからに閉じこもり悩み苦しむことから抜け出し、自分を肯定的にとらえられるようになった者と、そこへ向かって答えを探す者との出会いの中で進んでいくのが母親教室なのである。子どもが学校へ行かなくなると、風当たりとして「親は何をやっているのか」といった批判もあり、近所・校区の中であわせる顔がないと自分を責め・何をしたら良いのか途方に暮れる母親が多い。グループに参加し、体験を共有する過程で自分を価値ある親として前向きにとらえることができるようになれば、家族内でのスパイラルも解消し、子どもとともに親も成長する胎動となるにちがいない。

母親教室参加者への案内文は次の文章である。「このたび（神戸市）総合児童センター・（神戸市）児童相談所では、学校へ行けない子どもの理解を深め、親としてどの様にしたら良いかを一緒に考え、また同じ悩みを持つ親どうしの支えあいを目指して（思春期の子どもを持つ母親教室）を次の通り開催いたします。思春期のお子様のことで悩みをお持ちの皆様方のご参加をお待ちしております。」（第31期案内文より）案内では、理解を深める・一緒に考える・同じ悩みを持つ親どうしの支えあいを目指すところから、先に指摘した効果が期待されていると推察できる。この母親教室の特徴は、期間限定で組織されており、担当者に専門家が加わってサポートしている点である。専門家とは、大学関係者・カウンセラー協会・神戸市児童相談所ケースワーカーと心理判定員であり、合計8回の母親教室プログラムにおいて、オリエンテーション・ストレス、家族のコミュニケーション、きずな・かじとりに関する話・各回の振り返りに関わり利用者の啓蒙に勤める役割を担っている。プログラム内容は、第1回オリエンテーション、第2回ストレスについて、第3回家族コミュニケーション、第4回フィードバック、第5回フリーストーキング、第6回きずなとかじとり、第7回フィードバック、第8回不登校児のその後についてのゲストトーキングとなっている。家族コミュニケーションの話は母親が親子間の会話を一例記入してもちより、親子のコミュニケーションがどの様になされているか見つめ直す作業(母親ノート法)であり、家族のきずなとかじとりの話では家族全

員が家族関係でのきずなとかじとりの尺度を測定し、結果を把握しようとするワークにより家族それぞれのとらえ方の違いを知ることによって参加者が自分を振り返り、成長していくことを援助していくことを目指している。このように母親教室はシステムの下で機能し、進度があらかじめ想定されている。期限を設定していないグループと比較していないので、何とも言えないが、利用者の進度に合わせたものとは言えない側面もあるかもしれない。参加者を予測された情緒的变化へ導くために採用しているプログラム内容はこのグループの特質であり、一様にこの内容になるべきであるとか、修正すべきであるということ指摘することが本調査の目的でないことは断っておく。

母親教室は自由な話し合いを中心に、参加者の主体性を尊重しながら運営されるものであるが、約束事は存在している。それは守秘義務であり、利用者の発言で個人の秘密は口外しないことになっている。利用者のプライバシーを守る義務や、体験を共有することで、グループは他者の感情へ配慮することを訓練として提供しうる。始めから上手く参加者同士の交流が進められるわけではないであろうが、自分を見捨てることのない場をもち、他者を温かく見守り、心の余裕を取り戻し、参加者に成長して欲しいと提供者は願っている。それでは、実際に参加者はグループの運営をどう感じていたのだろうか。母親教室に参加することで何を発見し、参加者自身や子ども・家庭にどのような影響を与える事が出来たのだろうか。提供者側から母親教室への目標と参加者の体験が一致しているのかどうか、参加者の変化に母親教室としての意義を認めることが出来るのか本調査で確認していきたい。

## 方法・対象

・方法 郵送調査法 電話調査法

・質問項目（付録1：質問紙）

・対象者

1988年から1995年における13回の母親教室を利用した103人、105ケース（不登校の子どもを複数持つ母親が居るため）を調査対象とし回答を依頼した。（表1）

・回収経過

質問紙を発送後2週間目に督促葉書を送り1ヶ月後に52ケースの返送、さらに質問紙を再発送したところ、2ヶ月後には計68ケースの返送が得られた。これらの回収率は各回とも50%以上で、開催期が早いほどやや回収率が下がっているが、全13回の平均は67%であった。（図1）

加えて転出による住所不明の7ケースを除く未回答者30ケースから無作為抽出した10ケースに電話調査を行った。その結果、質問3：中学校卒業後から現在にいたる経過について5ケースの回答が得られ、5ケースが回答拒否であった。（表1）

この電話調査のうち回答のあった5ケースの予後は、質問紙返送分68ケースと比較して遜色のない結果であり（図2、図3）、回答拒否5ケースの理由は質問紙・教室・不登校・電話への抵抗など様々であった。よって、回答拒否は増加したが、未回答者全般に予後が悪いとは言い切れない。そこで、全105ケース中転出7ケースを除いた98ケースのうち78ケース（約80%）で何らかの回答が得られたことにより、その信憑性がある程度保証されているものとする。

表1

対象	開催時期	ID	ケース数	返送	転出	回収率		電話回答	電話回答拒否
第10期	1988.前期	1~6・105	7	3	1	3/6	50%	0	1
第13期	1989.後期	7~14	8	4	0	4/8	50%	0	1
第14期	1990.前期	15~23	9	5	1	5/8	63%	0	1
第15期	1990.後期	24~32	9	6	1	6/8	75%	1	0
第16期	1991.前期	33~40	8	3	2	3/6	50%	0	0
第17期	1991.後期	41~47	7	5	0	5/7	71%	1	0
第18期	1992.前期	48~55	8	5	0	5/8	63%	1	0
第19期	1992.後期	56~58	3	2	0	2/3	67%	1	0

第20期	1993. 前期	59~66	8	5	1	5/6	83%	0	0
第21期	1993. 後期	67~83	17	16	0	16/19	94%	0	0
第22期	1994. 前期	84~90	7	6	0	6/7	86%	1	0
第23期	1994. 後期	91~95	5	2	1	2/4	50%	0	1
第24期	1995. 前期	96~104	9	6	0	6/9	67%	0	1
		合計	105	68	7		平均 67%	5	5

図1 回収率

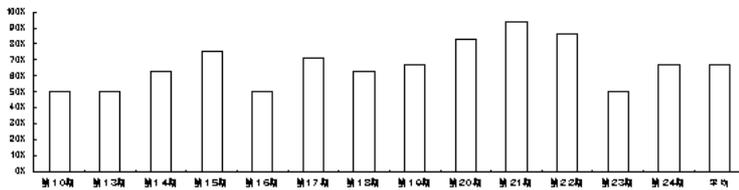


図2 予後の比較(中学校卒業直後)

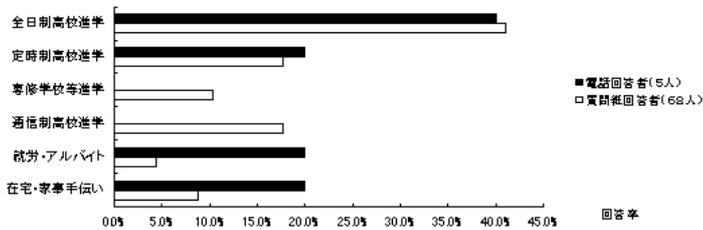


図3 予後の比較(中学校卒業から現在まで)

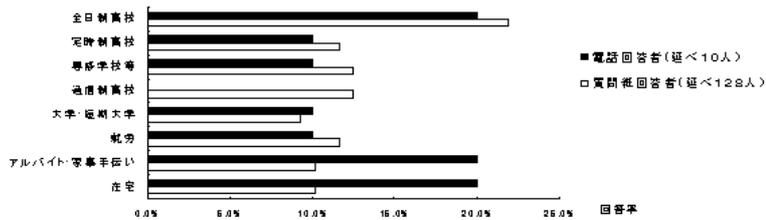
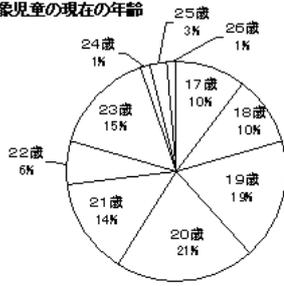


図4 調査対象児童の現在の年齢



## I 単純集計

・パーセンテージの母数について

①家族構成 ②参加前の不登校状況 ③参加後の資源利用状況における母数は質問紙を回収した68ケースで、④中学卒業直後の状況 ⑤中学卒業から現在までの経過 ⑥現在の状況については電話調査の10ケースを加えた78ケースである。①には質問紙の一部回答拒否や無回答、④と⑤には前述した電話での回答拒否、⑥にはその両方が回答拒否として含まれている。

### ①家族構成について（質問1）

現在の家族構成について尋ねたところ、結婚や就労により家族を離れ独立している人が5名いるが、その他一人暮らしも家族に含むと、核家族が76.5%、三世代同居が 11.8%、母子家庭が10.3%、回答拒否1.5%であり、うち母親教室参加後に離婚して母子家庭になったケースが1件あった。（表2）

	数	数/回答数
核家族	52	76.5%
三世代同居	8	11.8%
母子家庭	7	10.3%
父子家庭	0	0.0%
回答拒否	1	1.5%
合計	68	100.1%

### ②母親教室参加前の不登校状況（質問2）

母親教室参加前の不登校状況は、全欠が50%、断続欠が47%、保健室・別室登校が 3%であったが、不登校の発達過程における時期や年齢の違い、母親の主観などの影響があると思われる。ちなみに現在の母親教室参加者のほとんどは全欠状態であり、不登校の発達過程として断続欠から全欠へ移行し、登校再開前は断続欠となる場合もある。また、ケースワーカーの経験的認識では全欠の割合がもっと高いようである。（表3）

	回答数	回答数/全体(68)
全欠	34	50%
断続欠・渋り	32	47%
保健室登校	2	3%
合計	68	100%

### ③母親教室参加後の資源利用状況（質問3）

母親教室後の資源利用の状況は原籍校登校再開が 11.8%、転校先での登校再開が5.9%、保健室・別室での登校再開が7.4%となり、これらに複数回答は含まないので、登校再開は全体の25.1%であった。また、児童相談所での通所指導を続けたケースは 全体の82.4%であり、内訳は親子ともに通所が42.6%、親のみ通所が32.4%、子のみ通所が7.4%であった。その他、複数回答を含んで資源利用を見ていくと、出席日数が認めら

れる指導教室が12ケース、塾・家庭教師などが11ケース、児童相談所における子どものグループ指導が7ケース、一時保護所が7ケース、施設入所が4ケース、資源利用なしが5ケースであった。（表4）

	回答数	回答数/全体 (68)
原籍校登校再開	8	11.8%
転校先登校再開	4	5.9%
保健室登校（参加後）	5	7.4%
指導教室	12	17.6%
塾・家庭教師など	11	16.2%
親のみ通所	22	32.4%
子のみ通所	5	7.4%
親子通所	29	42.6%
グループ指導	7	10.3%
一時保護	7	10.3%
施設入所	4	5.9%
資源利用なし	5	7.4%

#### ④中学校卒業直後の状況（質問4）

中学校卒業直後の状況は進学が79.5%、就労・アルバイトが5.1%、在宅・家事手伝いが9.0%、回答拒否が6.4%であった。進学率が約8割に上ることは、母親教室参加前に半数が不登校全欠の状態だった（前述②）にもかかわらず、参加後におよそ4分の1が登校を開始した（前述③）という変化、そして高校進学に対する動機づけや環境の変化など要因が大きく働くものと推測される。また、進学しない残りの約2割では在宅が約1割、就労が約0.5割である。ちなみに進学の内訳は進学者を母数とすると、全日制高校が48%、定時制高校が21%、専修学校等が11%、通信制高校が19%となる。（表5）

この結果を兵庫県とのデータと比較すると、進学率が専修学校等も含めて97.5%よりもわずかに8%下回る程度だが、就労・アルバイトが1.7%の3倍、上記以外（無職・死亡・不明）の0.8%にあたる在宅・家事手伝い・回答拒否が約20倍と高くなっている。（資料1）

卒業生数							
卒業生数	78						
進学	62(79.5%)	内訳		通学中	中退	卒業	休学中
		全日制高校	30 (48%)	7	7	15	1

		定時制高校	13 (21%)	1	7	5	0
		専修学校等	7 (11%)	3	2	2	0
		通信制高校	12 (19%)	4	1	7	0
		合計	62(100%)	15	17	29	1
就労・アルバイト	4 (5.1%)						
在宅・家事手伝い	7 (9.0%)						
回答拒否	5 (6.4%)						
合計	78(100.0%)						

資料1 中学校卒業者の進路状況(H7兵庫県)

卒業生数	70,642
進学	68,219(96.6%)
専修学校等	630( 0.9%)
就労・アルバイト	1,221( 1.7%)
上記以外	572( 0.8%)
合計	70,642(100%)

⑤中学校卒業から現在までの経過（質問4）

中学校卒業から現在を含めた経過を延べ人数で見ると、中学校卒業直後（表5）から定時制高校が3ケース、専修学校等が10ケース、通信制高校が4ケース増加は、高等学校過程の中退・転校が繰り返されていることを示している。（表6-1）

表6-1 中学校卒業後から現在までの経過			現在の年齢区分	
	回答数			
進学	92	内訳	24	/68
全日制高校		30	9	/ 21
定時制高校		16	4	/ 12
専修学校等		17	4	/ 13
通信制高校		16	7	/ 9

大学・短期 大学		13	0 / 13
大検取得	3	2 / 1	
留学経験	3	0 / 3	
就労	16	1 / 15	
アルバイト・家事手 伝い	15	4 / 11	
在宅	15	1 / 14	
回答拒否	5	2 / 3	
合計	149	34 / 115	

表6-2

中途退学(20人)	入学者数	中退者数	中退率	男/女	現在の年齢区分	中途退学直後の状況				
全日制高校	30	7	23.3%	4/3	1 / 6	定時制高校3	通信制高校1	在宅1	不明1	大検1
定時制高校	16	10	62.5%	9/1	3 / 7	アルバイト3	通信制高校2	在宅2	専修学校等1	就労1 大学1
専修学校等	17	4	23.5%	3/1	1 / 3	アルバイト2	就労1	行方不明1		
通信制高校	16	2	12.5%	2/0	0 / 2	定時制高校1	大検1			
大学・短期大学	13	1	7.0%	0/1	0 / 1	就労1				
合計	92	24	平均 24.4%	6/18	5 / 19					

表6-3

卒業(30人)	入学者数	卒業者数	卒業率	男/女	現在の年齢区分	卒業直後の状況				
全日制高校	30	15	50.0%	7/8	0 / 15	大学1 0	アルバイト2	就労1	在宅2	
定時制高校	16	5	31.3%	4/1	0 / 5	専修学校等3	就労2			
専修学校等	17	7	41.2%	3/4	0 / 7	就労2	不明2	アルバイト1	在宅2	
通信制高校	16	7	43.8%	4/3	0 / 7	専修学校等5	大学1	アルバイト1		
大学・短期大学	13	2	15.4%	0/2	0 / 2	就労2				
合計	92	36	平均 36.3%	18/18	0 / 36					

注) 現在の年齢区分 (高等学校卒業年齢未満/以上)

資料2 県立高校中途退学状況 (H9兵庫 県)					資料3 高等学校卒業者の進路状況 (H7兵庫県)		
	(中退率)	男	女		卒業者数	67,618	
全日制高校	1,494 (1.3%)	960	534		進学	31,902(47.2%)	

定時制高校	425(13.3%)	332	93	専修学校等	17,551(26.0%)
合計	1,919 (1.6%)	1,292	627	就労・アルバイト	14,027(20.7%)
				上記以外（無職・死亡・不明）	4,138(6.1%)
				合計	67,618(100%)

予め中退率・卒業率は入学者数を母数にしており、現在通学中の者を含んでいることを断っておきたい。そこで現在までの経過（複数回答）のうち中途退学と卒業後の進路状況に注目する。（表6-2、表6-3）

まず、中退経験者20人のうち4人が2度繰り返しており、その後の状況は進学が約38%、就労・アルバイトが約33%、大検取得が約8%、在宅等が約21%であった。また、中退率を兵庫県県立高校のものと比較すると、全日制高校が1.3%の約18倍、定時制高校が13.3%の約4.7倍となり、調査対象が20人ではあるが高い率を示している。（資料2）

次に、高等学校課程卒業後の状況は、進学が約63%、就労・アルバイトが20%、在宅等が約17%であり、兵庫県のデータと比較すると、進学率は進学・専修学校等の73.2%に約10%とどかず、就労・アルバイトは20.7%とほぼ同じ、上記以外（無職・死亡・不明）にあたる在宅等は6.1%の約2.7倍となり、上記④中学卒業直後の状況のデータ比較よりも予後が良くなっていることが分かる。（資料3）また、大学・専門学校課程卒業後（専修学校等のうち専門学校の2人と大学・短期大学の2人）の状況は、就労・アルバイトが約83%、在宅が約17%であった。

#### ⑥現在の状況（質問4）

現在調査対象児童の年齢は様々であるため（図4）、就労・アルバイトの増加は自然であるが通学者との比較は難しい。そこで在宅に注目すると中学校卒業直後の在宅・家事手伝い7ケースからは少し増えているが、その状況は実質、外出可と引きこもりの8人つまり約1割について予後に改善が見られないと言える。（表7）

	回答数	内訳	現在の年齢区分
通学中	32(41.0%)		19 / 13
全日制高校		8	8 / 0
定時制高校		1	1 / 0
専修学校等		6	3 / 3
通信制高校		7	7 / 0
大学・短期大学		10	0 / 10
就労	15(19.2%)		1 / 14
アルバイト・家事手伝い	8(10.3%)		2 / 6
在宅	12(15.4%)		1 / 11
求職中		1	0 / 1
受験浪人		1	0 / 1
大検取得中		1	0 / 1
外出可		5	1 / 4
引きこもり		3	0 / 3

不明		1	0 / 1
主婦	1(1.3%)		0 / 1
行方不明	1(1.3%)		0 / 1
回答拒否	9(11.5%)		2 / 7
合計	78(100%)		25 / 53
注) 現在の年齢区分 (高等学校卒業年齢未満/以上)			

・単純集計のまとめ

以上の結果より、母親教室参加当時中学生（ただし高校生1人を含む）で不登校状態であった子どもは、学校や児童相談所などのフォーマルな資源と塾・家庭教師・私設の相談機関や質問項目以外に存在するインフォーマルな資源の利用で徐々に社会資源との関わりを増やしていることが分かる。兵庫県のデータ（資料1.2.3.）との比較により、中学校卒業直後の進学率は79.5%と意外に高いながらも中退率が高く（表6-2）、高等学校課程卒業後には進学率が低下しているという学校への適応の難しさが見られた。一方で、全体を通して在宅等の割合の格差は縮小しており、個々のペースで社会生活を送っている予後を窺うことができた。

⑦家族資源性（きずな・かじとり）と関係改善

調査対象103名のうち、母親教室参加時にオルソンの円環モデルに基づく家族システムの健康機能度をきずな（cohesion）とかじとり（adaptability）の2変数について測定し資料として残っていた者が33名いる。このうち母親教室に参加して親子関係改善・夫婦関係改善・家族関係改善のいずれかが起った母親（以下、関係改善群）と、いずれも起らなかった母親（以下、非関係改善群）の家族資源性に差異が見られるか調べた。

表8 きずなと関係改善 回答者数内訳

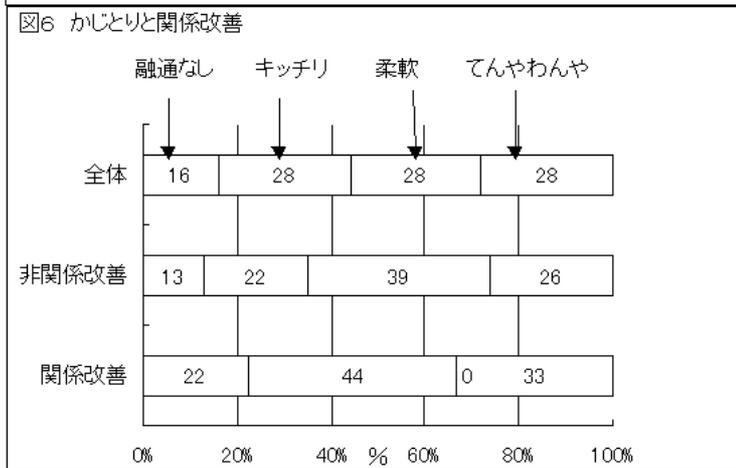
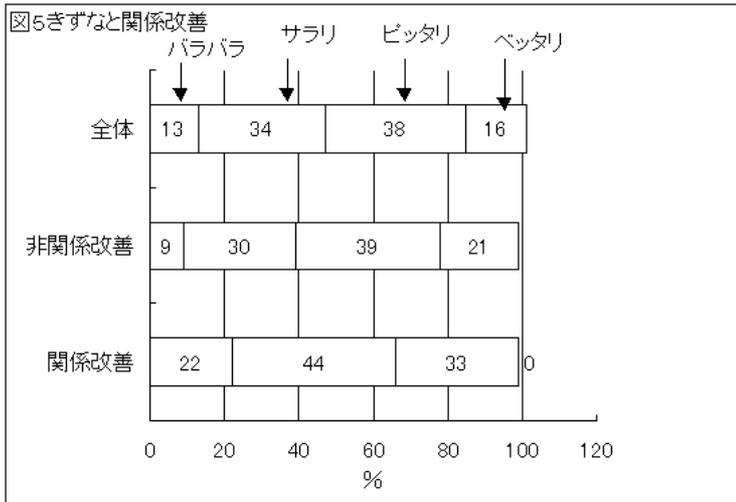
	低い		高い		
	バラバラ	サラリ	ピツタリ	ベッタリ	合計
全体	4	11	12	5	32
非関係改善	2	7	9	5	23
関係改善	2	4	3	0	9

表9 かじとりと関係改善 回答者数内訳

	低い			高い	
	融通なし	キッチリ	柔軟	てんやわんや	合計
全体	5	9	9	9	32
非関係改善	3	5	9	6	23

関係改善	2	4	0	3	9
------	---	---	---	---	---

注) 境界線上に位置する場合は、両方のカテゴリーに配分する



きずなについて(表8・図5)は、全体・非関係改善では割合に顕著な差は見られないものの、関係改善群ではきずなが低い回答者(「バラバラ」「サラリ」)の占める割合が、全体と較べて(それぞれ9%・10%)増加している。また関係改善群において最もきずなが高い「ベッタリ」は0%であった。概して、きずな改善とはきずなが低い状態から高めたものであるといえる。かじとりについて(表9・図6)は、非関係改善群ではかじとりが高い回答者の割合(「柔軟」39%「てんやわんや」26%)が大きいのに対して、関係改善群ではかじとりが低い回答者の割合が高い(「柔軟」39%「てんやわんや」26%)。関係改善群に「柔軟」の回答者が存在しないのは、柔軟が適切な領域であるためと考えられる。かじとりに関しては、低かったかじとりを高めるという改善傾向がみられた。以上、家族関係性について考察したが、今回は調査対象が33名と少なかった。調査対象を増えせば、より信頼性の高い結果が得られるだろう。家族資源性についての調査を母親教室参加当時だけでなく、関係改善を答えたのちに再度試み関係性の変化を調べれば、家族資源性と関係改善の関連が明確になるかもしれない。今後の課題である。

## II コレスポネンス分析

郵送した質問紙（付録1）は、選択項目（質問1-5, 7）と自由記述（質問6-8）で構成されている。それぞれにカテゴリーを作成し、コレスポネンス分析をおこなった。以下、その結果を報告し、考察していきたい。

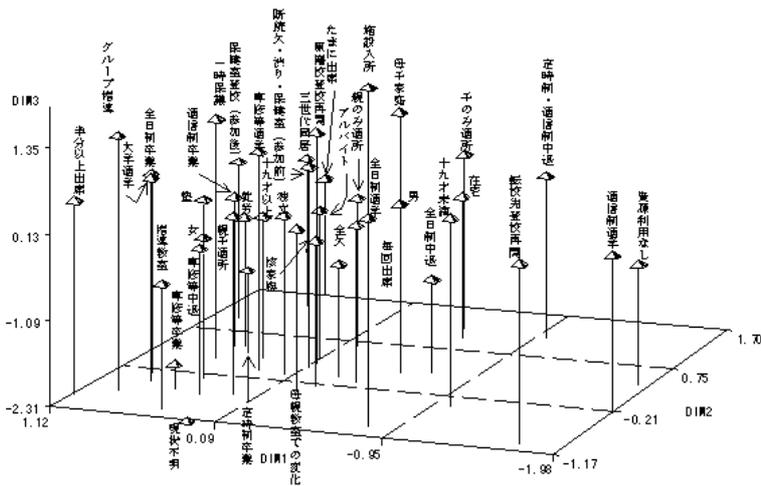
### II-1 選択項目について（質問1-5, 7）

ここでは、回収された質問紙の選択項目（質問1-5, 7）の関連性をみる。各カテゴリーの数量化を行い、得られた重みの差異を関連性の指標とする。

まず、アンケートの選択肢42項目と家族構成から、64項目のカテゴリーを作成する。次に作成したカテゴリーのうち、回答率が5%以下の項目は、次の2つのいずれかの方法により項目を精選した。

- ① 内容的に同一のカテゴリーとなりうる他の項目と組み合わせる。
- ② 他の項目と組み合わせることのできない単独の項目は削除する。

以上の作業により、最終的に41カテゴリーを作成した。（付録2：カテゴリー表）



コレスポネンス分析から得られた結果（上図）をまず全体から、次にカテゴリーの内容別に考察していきたい。

項目が密集している箇所（以下グループとする）とグループに属さない項目に分けられる。グループのほぼ中心に「母親教室で変化があった」というカテゴリーが位置している。これは、ある特定の回答者に変化がもたらされるのではなく、さまざまな経緯をもつ参加者それぞれに「変化」は起こり得ることで、「変化」後の経過も様々であることを反映しているのではないだろうか。そしてDim1(1.112~0.09)Dim2(-1.17~0.2)Dim3(-0.6~1.4)に「指導教室」「塾など」「グループ指導」「一時保護」という子どもに直接かかわる資源の項目が集まっており、「資源利用なし」が対照的な位置である Dim1(-1.91024)Dim2(0.37268)Dim3(-0.57314)に位置している。「資源利用なし」に近い項目は、「通信制高校通学中」「転校先にて登校再開」「定時制高校・通信制高校中退」「全日制高校中退」「在宅」「子のみ通所」である。これらの項目はグループに属していない、つまり「母親教室での変化」とは関連が薄いものでもある。これらに共通していることは、在宅の要素と今いる学校との不適応（中退・転校）を感じさせる点である。これらの項目は母親教室での変化の影響が及びにくいものである。

#### ①家族構成について

「核家族」「三世代同居」はグループに属するものの、「母子家庭」は他の項目と関連が薄い。これは、母子家庭への支援サービスの利用状況が核家族・三世代同居よりも少ないということである。そして「母親教室での変化」との関連性の強さは、「核家族」>「三世代同居」>「母子家庭」の順に強い。

#### ②中学卒業時までの資源利用状況

母親教室参加後の不登校状況については、「原籍校登校再開」「保健室登校」がグループに属し、「転校先登校再開」は属さない。ここから、「転校先登校再開」が前者2つと違って、環境の変化を伴うなど、同じ登校再開でも性質は異なるものと捉えるべきであるといえる。ただ、「登校再開」に関しては再開しても不登校を繰り返す場合もあるので、母親教室参加後から中学卒業時までで区切って尋ねたこの質問で登校再開したとされた対象児童が不登校を終えたと判断し、予後が安定したととらえるべきではないことに注意したい。

#### ③母親教室の出席状況

「ほぼ毎回出席した」者は「母親教室で変化があった」傾向があり、「半分以上出席した」「たまに出席した」では、「変化」との関連が同程度に薄いことが分かった。これは全回出席という参加原則の意義が表れている。

#### ④年齢区分

「19才未満」よりも「19才以上」の方が、「母親教室で何らかの変化があった」という項目に関連をもっている。これは、参加者は参加当時よりも年月を経て振り返った時に母親教室を評価しているといえる。

## 課題

回答方法が自記式であるためケースワーカーの認識に基づく事実とは違う点もいささかみられることから、項目の関連性が正確につかめていない恐れもある。しかし、教室に参加した母親の認識を知ることができたのではないだろうか。質問形式が不適切だったため予後の時間経過が把握できない面もあり、アンケート回収後に重要な項目で分からないことは電話により調査させていただいている。（その際回答を拒否されたものは、分析では無回答と同様にその項目を欠損値として扱っている。）

## II-II 自由記述について（質問6-8）

回収された質問紙68ケースのうち、62ケース（91.2%）に自由記述があった。自由記述から、参加者が母親教室に何を求めた何を得たのか探るべく以下の作業を行った。

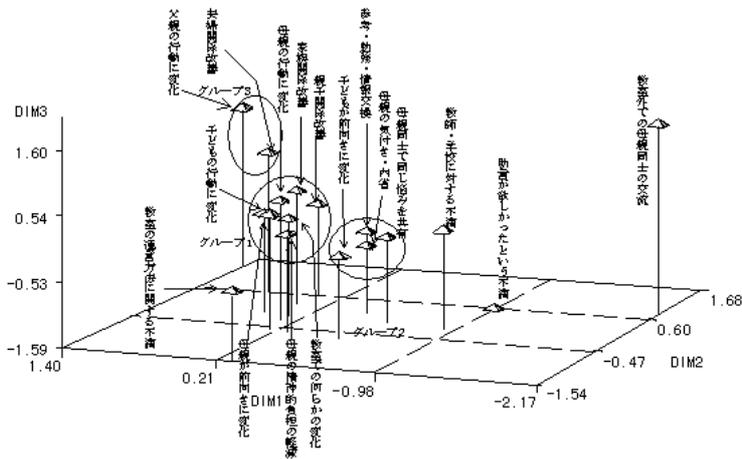
まず、回答で共通して何度も使われている言葉・重要と思われる言葉に下線を引く。次に下線をひいた箇所の内容をまとめ、カテゴリーを作成する。（カテゴリー作成は、調査者3人が各々上記の作業を行った後、調査者全体の意見をまとめた。）

番号	カテゴリー	回答数	内容（回答数）
1	母親の精神的負担の軽減	28	<p>気が楽になった（5）</p> <p>子どものありのままを受け入れられるようになった</p> <p>（3）</p> <p>教室によって支えられた（3）</p> <p>気持ちが安らいだ（3）</p> <p>精神的なゆとりが生まれた（2）</p> <p>気長になった（2）</p> <p>「母親である自分に不登校の責任がある」という自責の念が薄れた（2）</p> <p>など</p>
2	母親が前向きに変化	10	<p>前向きになれた（7）</p> <p>開き直れた（2）</p> <p>強くなった（1）</p>
3	母親同士で同じ悩みを共有	43	<p>同じ悩みのお母さんと話し合いができた（30）</p> <p>自分だけが悩んでいるのではないと知った（6）</p> <p>気を許して話すことができた（4）</p> <p>など</p>
4	教室外での母親同士の交流	9	<p>今でも交流のある友人ができた（59）</p> <p>など</p>
5	母親の気付き・内省	19	<p>気持ちを整理し、行動を振り返った（8）</p> <p>学校が全てではないと分かった（4）</p> <p>気長に見守ることが必要と気付いた（2）</p> <p>子どもを全面的に包み込むことが大切と思った</p>

			(2) など
6	参考・勉強・情報交換	10	他のお母さんの話が参考になった(5) など
7	親子関係改善	7	会話が增えた(5) 子どもが心を開くようになった(1) 子が自分のことを分かってくれと評価してくれた  (1)
8	夫婦関係改善	6	話し合いができるようになった。(6)
9	家族関係改善	5	家族の雰囲気明るくなった(2) 不登校について家族が理解するようになった(1) 会話が增えた(1) 家族関係が良くなった(1)
10	母親の行動に変化	16	子どもに対する接し方の変化(4) 家族に対して穏やかに接するようになった(2) 積極的に物事に取り組めるようになった(4) など
11	子の行動に変化	22	行動的になった(14) <ul style="list-style-type: none"> <li>• 積極的に勉強を始めた</li> <li>• 外出するようになった</li> <li>• 生活のリズムが整ってきた</li> <li>• 登校再開</li> </ul> 自分から話をするようになった(2) など
12	助言が欲しかったという不満	9	具体的な解決方法を知りたかった(5) など
13	教室の運営方法に関する不満	6	人数・時間が不適當(2) 回数をもっと多くして欲しい(1)

			カメラで録画することに抵抗を感じる（１） など
14	交通費がかかった	1	
15	調査結果が知りたい	2	
16	子どもが前向きに変化	16	興味のあること・目標を見つけ始めた（５） 明るくなった（３） しっかりしてきた（２） 前向きになった（１） など
17	父親の行動に変化	5	気長になった（２） 母親の話を聞くようになった（２） 協力的になった（１）
18	教師・学校に対する不満	5	もっと理解して欲しい（２） など
19	子どもに友人の支えがあった	3	友達と連絡をとるようになった（３）
20	教室での失望感	3	子どものことを理解してもらえなかった（２） あまり意味がなかった（１）
21	教室で何らかの変化	31	参照：質問紙 質問 7 に対応

作成したカテゴリーの相関関係を調べるために、コレスポンデンス分析をおこなった。各カテゴリーの数量化を行い、得られた重みの差異を関連性の指標とする。なお、分析の際、回答率が5%未満であるカテゴリー4つ（14「交通費がかかった」・15「調査結果が知りたい」・19「子どもに友人の支えがあった」・20「教室での失望感」）を削除した。



結果（上図）から、関連の強い項目の集まりをグループ1・2・3とし、単独で他のカテゴリーとの関連があまり見られないカテゴリーを単独群として、考察していきたい。

#### ①グループ1について

- 1 「母親の精神的負担の軽減」・2 「母親が前向きに変化」・7 「親子関係改善」
- 8 「夫婦関係改善」・9 「家族関係改善」・10 「母親の行動に変化」
- 11 「子の行動に変化」・21 「教室で何らかの変化」

不登校に対する主観的な振り返りに関する項目の集まりである。記述内容を見ていると、子どもが不登校になった時は驚き動揺し、なぜ自分の子どもは不登校になったのかと原因を探そうと不登校に対して否定的であるが、教室に参加することで自ら気持ちを整理し、不登校に対して前向きに取り組むようになった母親の様子がうかがえる。結果からは、「母親の行動の変化」が、「子どもの行動に変化」「教室で何らかの変化」を起こすことと関連が強いことを示している。このことより、母親との関わりを通じて子どもの変化を起こすことが可能だといえる。

#### ②グループ2について

- 3 「母親同士で同じ悩みを共有」・5 「母親の気付き・内省」
- 6 「参考・勉強・情報交換」・16 「子どもが前向きに変化」

不登校に関する客観的な振り返りの項目に関する集まりである。教室で母親たちは不登校の子どもをもつ他のお母さんとの出会いによって、悩んでいるのは自分だけではなく、不登校に対する考え方も人それぞれであることに気付き、不登校に対して新しい見方をもつ。このことは「子どもが前向きに変化」することにつながっていくと言える。

#### ③グループ3について

## 8 「夫婦関係改善」・17 「父親の行動に変化」

父親に関する項目である。母親が変わると父親が変化したという意見がほとんどであった。「子どもの行動の変化」との関連は、「母親の行動の変化」と比較すると薄い。このことから、「子どもの行動の変化」に結びつきやすいのは、父親の変化よりも母の変化といえる。これは、母親教室の焦点が、夫婦関係よりも母子関係に重点をおいていることを示している。

### ④単独群について

4 「教室外での母親同士の交流」・12 「助言が欲しかったという不満」

13 「教室の運営方法に関する不満」・18 「教師・学校に対する不満」

「母親教室で何らかの変化があった」という項目と関連が薄いカテゴリーである。「教師・学校に対する不満」は母親教室に関する記述ではないため、「教室外での母親同士の交流」は回答者の参加期が偏っているため、単独群に含まれていると考えられる。「助言が欲しかったという不満」「教室の運営方法に関する不満」は、母親教室を安心して話ができる場所・自分自身で気づきをしていく場所ととらえていない母親の声と捉えられるだろう。

## 考察

今回の調査結果より、母親教室は参加した母親だけでなく子どもや家庭にどのような影響を与えることができたのか検討する。また、不登校をする子ども自身ではなくその母親のグループワークとしての意義と可能性について考察していきたい。

まず、子どもの予後に関して見ていこう。表4によると、本調査で不登校現象を表していた子どもの25.1%が登校を再開している。そして、塾や家庭教師などの学習環境を受け入れた者は16.2%にも達しており、41.3%の子どもは学習環境へ復帰している。義務教育の終了後には何らかの形で進学した子どもが79.5%であった。先に母親が「学校へ行くことが全てではない」ことに気付くことも重要な変化であることを述べたが、結局、母親教室参加後に約8割の子どもは学習環境に自ら手を伸ばしている。この現状は「学校が全てではない」という気付きと一見矛盾しているが、子どもの不登校状態からの変化を導くものとして母親の気付きとそれに伴う行動の変化が密接であることは自由記述のコレスポンス分析より明らかである。また、母親教室参加後数年が経った現在の状況では、表7より在宅のうち外出可・引きこもりと回答拒否を合わせて15.3%の子どもに変化をきたすような効果を母親教室は提供できなかったのではないだろうか。これらの者は自分で掴み取る者をまだ手に入れておらず、それを導く母親の気付きや変化がないか、もしくはそれが子どもに波及していないのかもしれない。ただし、通学中の者で表6-2の中退率の高さから分かるように不登校や引きこもりを再び経験するケースが予想できるが、ここでは何らかの社会資源への働きかけを子どもの行動の変化と捉えている。逆に様々な資源・要因の一つとして母親教室が残り74.7%の子どもを不登校状態から発展させる間接的な役割を果たしていると言えるだろう。

次に、母親の気付きと行動の変化に始まる子ども・家族関係の変化の経過と母親教室の役割について調査の結果から推測する。教室で何らかの変化があったと感ずることが出来た人には、引き続き、精神的負担が軽減され、日常生活での活動が前向きなものへと変化し、子どもの行動にも変化をもたらし、親子関係・家族関係にまで改善の余地を与えてい

ることがコレスポネンス分析自由記述により明らかになってくる。母親が“気づく”とは、不登校現象が子どもの問題だけを表出しているのではなく、自分の問題だと理解することである。これに気づけば、子どもへの対処も変わり、学校へ戻すことが目標であったなら、母子関係も楽なものになるだろう。「悩みをうち明けて、本気で相談できる人がいない」という母親には、教室の存在が安心して本音で語れる場所ともなりうる。“気づく”ことに到達し、存在感の変化した母親には、安定感・明るさ・不登校現象が悪いことなのではない等の態度を子どもの前で無意識的に実演することになり、子どもは「自分が悪いことをしている」という呪縛から解放される。子どもが母親に対する信頼関係を取り戻し、本当に分かり合えていると感じることが出来たなら、子どもにも、“気づき”によって自分でつかみ取るものを個人的に体験するだろう。子どもにも、親にも、“気づく”という体験を提供することが出来れば、不登校児を持つ家族には何らかの好転を、時には劇的な変化へと、母親教室は導いているのだという結果を、この追跡調査では読みとることが出来たのである。

また、母親教室の目標と母親の体験の一致について、グループの提供者は、参加者の成長を期待しているので、結果では、母親に“気づき”がある場合、参加者はそれに応えることを証明できた。“気づき”へ導くことが母親教室のまず第一のハードルになっていることは“気づく”ということが、自分で手に入れるもので、提供者側はきっかけを用意するにとどまることを示している。“気づき”を発展させた者、新たな自分の居場所として参加者との間で共感を深めた者は、教室の運営を否定的には考えていないようで、教室に参加することが不登校現象の母親へ対する精神的負担を軽減することも分かった。母親の変化が子どもの変化を引き出し、母子の緊張緩和が、夫婦関係・父子関係・家族関係の改善へと発達していく構図をもコレスポネンス分析自由記述は示してくれた。一様に効果が行き渡るわけではないが、もし、参加者に“気づき”が芽生えたとしたら、提供者の目標と、参加者が時間と共に経験していくドラマは同じ線上にあると言えるだろう。

このような母親を通じた家族関係の変化の目的に基づき、母親教室では独特のプログラ

ム（第2回ストレスについて、第3回家族コミュニケーションについて、第6回きずな・かじとりについて）を行ってきた。グループ1・2・3では、母親が成長していくことで「子どもの行動に変化」が起きており、また子どもの変化よりは関連が薄いものの「父親・家族の変化」も報告されている。これは母親教室が母子の関係性に焦点をあてながら、父親そして家族の関係性まで影響を及ぼしてきたことを証明しているといえるだろう。

最後に、今回の調査からは、この結論にたどり着くまでの経過も様々であることがうかがえたが、自分自身で答えを見つけていくことはどの母親も変わりなかった。子どもが不登校になった時、母親は驚き動揺する。「一体何が悪くて不登校になったのか」学校、家庭、今までの育て方、人によって思いつく原因はそれぞれであろう。しかし、不登校を振り返ることが出来るようになった母親たちの意見は次のように一致していた。「誰が・何が悪いわけではなかった。確かにきっかけはあったかもしれないが、不登校は私たちに必要なことだった。」こうして、子どもの不登校という無意識のメッセージを母親・家族が受け止め始める。家族とは人間関係が絡み合っている集合体である。一人の行動が変われば、相手（父親であれ子どもであれ）の対応も変わる。教室に参加するのは母親であるが、母親の成長を支援することで教室は家族の成長とも深く関わっている。安心して本音で話すことができる場として利用してもらうことで、参加者に主観的・客観的な振り返りを促し、そして参加者が自分自身で答えをみつけていくきっかけの一つとなりうることを、今までの母親教室は実績として残しているといえる。

## 課題

今回の調査の反省として、質問の形式の不適切さから経過を把握することが不十分になったことは否めない。（1 母親教室参加年齢のちがいにより、結果の比較が困難で統一性がかけた感がある。2 参加直前・参加直後の状態を問うだけでは、不登校状況の経過全体をとらえることはできなかった。3 社会資源の選択肢の数が不十分だった。）また、今回は参加者である母親に回答していただいたが、不登校児童も対象にするなど様々な調査の余地を残しているだろう。そして、母親教室における初の予後調査であるため、今後継続して調査することで質問項目の質・対象者の数を確保し、正確性・信頼性を高めていけばより母親教室運営の一助となるのではないか。

本論文作成過程では、調査にご協力いただいた母親教室参加者の皆様をはじめ、神戸児童相談所母親教室スタッフの方々に多大なご協力・ご指導をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げたい。

## 参考文献

- 森田洋司：『「不登校」現象の社会学』学史社、1991
- 森田洋司：不登校現象の意味するもの 『月刊学校教育相談』1993、6～16p
- 立木茂雄：[登校ストレスと家族関係ー共分散構造分析による因果モデルの検証ー](#) 『家族心理学年報』12巻、1994、50～65p
- 真仁田昭：[「学校ぎらい」の心理とその背景](#) 『児童心理』1998、1～10p
- 荒井清：[「不登校の親のパートナーに」](#) 『月刊生徒指導』1997、12～15p
- 福間悦夫：[登校拒否症の長期予後](#) 『精神医学』1980、401～408p
- 堀内一男 小坂勝好 川越巍 服部祥子 甲斐志郎 福島忠彦：[登校拒否問題を考える](#) 『文部時報』1992、8～17p
- 茨木俊夫：[実験例による登校拒否症状の経年比較と複合事例に対する治療パラダイム](#) 『行動療法研究』1986、91～95p
- 茨木俊夫：[登校拒否を理解する](#) 『児童心理』1994、1～7p
- 五十嵐敦：[進路選択あるいは中退](#) 『現代のエスプリ』1998、65～72p
- 稲村博：[海外日本人学校にはなぜ登校拒否が少ないか](#) 『登校拒否』有斐閣選書、1988 詫摩武俊・稲村博 編、74～88p
- 門眞一郎：[不登校の予後調査と議論のまとめ](#) 『発達』1997、31～40p
- 神保信一：[概説 登校拒否](#) 『現代のエスプリ』1979、5～20p
- 笠原嘉：[『退却神経症ー無気力・無関心・無快樂の克服』](#) 講談社現代親書、1988
- 笠原嘉：[登校拒否をめぐって](#) 『児童青年精神医学とその近接領域』1989、242～251p
- 小泉英二 高橋栄 中山和子 加室弘子 田村美保子 岡添康子：[情緒障害児の予後に関する研究](#)  
『現代のエスプリ』  
1979、198～212p
- 松本英夫：[中学生の登校拒否児童の発達過程による類型化の試み](#) 『児童青年精神医学とその近接領域』1986、97～109p
- 室田洋子：[登校拒否を防ぐ家庭のあり方](#) 『児童心理』1998、22～28p

- 永瀬純三：[学校における登校拒否](#) 『文部時報』1992、30～33p
- 岡村達雄：[「不登校」と「多様化」政策との関連をめぐって](#) 『青少年問題研究』1993、68～81p
- 坂本昇一：[登校拒否問題の課題](#) 『文部時報』1992、6～7p
- 佐々木保行：[父親の発達研究と家族システムー生涯発達心理学的アプローチ](#) 『教育心理学年報』1996、137～146p
- 佐藤琢志：[進級かそれとも留年か](#) 『月刊生徒指導』1997
- 清水勝之：[日本における不登校と学校教育](#) 『児童青年精神医学とその近接領域』1989、232～238p
- 生野照子：[思春期の病理](#) 『現代のエスプリ』1995、115～124p
- 相馬誠一：[「葛藤の少ない不登校」の状態像と対応](#) 『月刊学校教育相談』1996、16～21p
- 田上不二夫：[最近の不登校・登校拒否のタイプ](#) 『児童心理臨時増刊』1998、2～11p
- 高士直子：[不登校をどう理解するかー思春期の不登校と自己決定感](#) 『現代のエスプリ』1995、125～133p
- 若林慎一郎 他7名：[登校拒否と社会状況との関連についての考察](#) 『児童精神医学とその近接領域』1982、160～180p
- 山田和夫：[大学生の登校拒否](#) 『登校拒否』有斐閣選書、1988 詫摩武俊・稲村博 編、90～103p
- 長坂正文：[葛藤の少ない不登校高校生の理解と対応](#) 『月刊学校教育相談』1996、22～25p
- 鈴木永：[親不信の担任へのお願い](#) 『月刊学校教育相談』1996、26～29p
- 菊池喜弘：[学校がもっと楽しければどんな子でもいける](#) 『月刊学校教育相談』1993、26～31p
- 神谷克己：[激変する経済社会の中の教育](#) 『月刊学校教育相談』1993
- 岩本俊彦：[登校拒否増加の社会的背景](#) 『月刊学校教育相談』1993
- 高垣忠一郎：[『登校拒否・不登校をめぐって』](#) 青木書店、1991、62～77p
- 石川憲彦 内田良子 山下英三郎 編：[『子どもたちが語る登校拒否』](#) 世織書房、1993
- 三好邦彦：[『学校が怖い』](#) 朝日出版社、1984 登校拒否を考える会『[学校に行けない子どもたち](#)』教育史料出版会、1987

大原健士郎：『「家族愛」その精神病理』講談社、1996

河合隼雄：『子どもと学校』岩波書店、1992

池埜聡 武田丈 倉石哲也 大塚美和子 石川久展 立木茂雄：

「オルソン円環モデルの理論的・実証的検討構成概念妥協化からのアプローチ」

『関西学院大学社会学部紀要』61号、  
1990、83～122 p

Olson,D.H., Sprenkle,D.H., and Russell,C.S.,

“Circumplex model of marital and family system:l.  
Cohesion and adaptability dimensions.”

『Family Process』  
23,1979,33～48

大塚美和子 立木茂雄：[「Clinical Rating Scale によるオルソン円環モデルの実証的検証」](#)

『家族心理学研究』5巻1号、1991、  
15～32 p

武田丈 立木茂雄：「家族システム評価のための基礎文献・オルソンの円環モデルを中心として」

『関西学院大学社会学部紀要』60号、  
1989、73～97 p

谷口泰史：[登校拒否の実体理解と処遇観](#) 『ソーシャルワーク研究 1986』1986、  
152～160p

資料 兵庫県統計書

## 付録1 質問紙

1.現在の家族構成についてお書き下さい。

続柄	氏名	年齢

2.母親教室に参加する以前のお子さんの状況について教えてください。

(当てはまる項目に○をして下さい。)

(1) 不登校全欠

(2) 不登校断続欠

(3) 登校渋り

(4) 保健室登校

(5) その他(具体的に )

3.母親教室終了後から中学卒業年齢までの経過について教えてください。

(当てはまる項目全てに○をして下さい。)

(1) 親のみの通所

(2) 子のみの通所

(3) 親子共に通所

- (4) BONBON倶楽部 (ANNON倶楽部) への参加
- (5) 楠教室への参加
- (6) 生田教室への参加
- (7) 施設入所
- (8) 一時保護入所
- (9) 原籍校登校再開
- (10) 転校先にて登校
- (11) 保健室登校
- (12) 塾・フリースクール・サークルなどの利用
- (13) 変化なし
- (14) その他 (具体的に )

4. 中学卒業年齢から現在に至る経過について教えてください。

(カッコの中の当てはまる項目全てに○をつけて下さい。)

- (1) 全日制高校進学 ( 通学中 ・ 中途退学 ・ 卒業 )
- (2) 定時制高校進学 ( 通学中 ・ 中途退学 ・ 卒業 )
- (3) 専門学校 ( 通学中 ・ 中途退学 ・ 卒業 )
- (4) 通信制高校進学 ( 通学中 ・ 中途退学 ・ 卒業 )
- (5) 通信制大学進学 ( 通学中 ・ 中途退学 ・ 卒業 )
- (6) 大学進学 ( 通学中 ・ 中途退学 ・ 卒業 )
- (7) 就労
- (8) その他 (具体的に )
- (9) 短期大学 ( 通学中 ・ 中途退学 ・ 卒業 )

(10) 大検取得

5.当時の母親教室（全8回）にどの程度出席されましたか。

(1) ほとんど毎回出席した

(2) 半分以上出席した

(3) たまに出席した

6.母親教室の良かった点・悪かった点を挙げて下さい。

良かった点

悪かった点

7.母親教室に参加されてご家族のなかで変化がありましたか。（ はい ・ いいえ ）

「はい」と答えられた方のみ それとはどんな変化でしたか。

8.その他ご自身・お子さん・ご家族についてお聞かせいただけることがあればご自由にお書き下さい。

付録2 選択項目カテゴリー						
質問	変数番号	カテゴリー	回答数	削除・合成	合成後のカテゴリー	
1	1	核家族	52		回答数	
	2	三世同居	8			
	3	母子家庭	7			
	4	父子家庭	0	削除		
	5	離婚	1	削除		
	6	一人暮らし	3	合成		
	7	独立	2	合成		
	61	区分(19歳未満)	23			
	62	区分(19歳以上)	50			
	63	性別(男)	45			
	64	性別(女)	28			
2	8	全欠	34			断続欠・渋り
	9	断続欠	30	合成		
	10	登校渋り	2	合成		
	11	保健室登校(参加前)	1	合成		
	12	別室登校(参加前)	1	合成		保健室登校(参加後)
3	13	原籍校登校再開	8			
	14	転校先登校再開	4			
	15	保健室登校(参加後)	4	合成	5	
	16	別室登校(参加後)	1	合成		
	17	指導教室	12		塾など 13	
	18	塾など	8	合成		
	19	家庭教師	2	合成		
	20	親のみ通所	22			
	21	子のみ通所	5			
	22	親子通所	29			
	23	グループ指導	7			
	24	一時保護所	7			
	25	施設入所	4			
	26	資源利用なし	5			
	27	その他の資源	3	合成	定時制・通信性中退	
4	28	全日制高校通学中	8			
	29	全日制高校中退	7			
	30	全日制高校卒業	14			
	31	定時制高校通学中	0	削除		
	32	定時制高校中退	10	合成		
	33	定時制高校卒業	5			
	34	専修学校等通学中	6			
	35	専修学校等中退	4			
	36	専修学校等卒業	7			
	37	通信制高校通学中	7			
	38	通信制高校中退	2	合成		
	39	通信制高校卒業	7			
	40	通信制大通学中	0	削除		
	41	通信制大学中退	0	削除		
	42	通信制大卒業	0	削除		
	43	大学通学中	10			
	44	大学中退	0	削除		
	45	大学卒業	1	削除		
	46	短期大通学中	0	削除		
	47	短期大中退	1	削除		
	48	短期大卒業	1	削除		
	49	大検取得	3	削除		
	50	留学経験	3	削除		
	51	就労	16	合成		
	52	アルバイト	15	合成		
	53	主婦	1	合成		
	54	在宅	14			
	55	行方不明	1	削除		
	56	現状不明	4			
5	57	ほとんど毎回出席	51		就労16	
	58	半分以上出席	7			
	59	たまに出席	7			
7	60	母親教室での変化	31			

Column Coordinates Dim1 Dim2 Dim3

VAR1 -0.14274 -0.27808 -0.20401

VAR2 0.67916 1.43714 -0.06613

VAR3 -0.20852 0.81757 1.10552

DOKURIT 0.14901 -0.07645 -0.00603

VAR8 -0.18612 -0.04072 -0.66516

DANKETU 0.05779 0.08753 0.63357

VAR13 0.06815 0.21091 1.06611

VAR14 -1.71956 -1.02204 0.18799

HOKENN 0.95477 1.04280 0.05402

VAR17 0.50180 -0.99209 -0.53503

JYUKU 0.55330 -0.31390 0.28385

VAR20 -0.00433 0.64963 -0.11139

VAR21 -0.45977 1.22693 0.31306

VAR22 0.23970 -0.58098 0.24437

VAR23 0.91679 -0.70732 1.34621

VAR24 0.68859 0.14777 1.18701

VAR25 0.10702 1.07919 1.29225

VAR26 -1.91024 0.37268 -0.57314

VAR28 -0.76972 -0.95905 0.61143

VAR29 -0.66641 0.22662 -0.94210

VAR30 0.89360 -0.30585 0.59760

TYUUTAI -1.00767 1.18783 0.10969

VAR33 0.56180 0.31126 -1.09578

VAR34 0.32156 -0.04677 0.86603

VAR35 0.42189 -0.63763 -0.21622

VAR36 0.60762 -0.59537 -1.93181

VAR37 -1.98110 -0.24488 -0.07904

VAR39 0.68896 0.39621 -0.09421

VAR43 0.81940 -0.46336 0.62928

SYUUROU 0.64009 0.44530 -0.40650

VAR52 0.08390 0.29121 -0.12169

VAR54 -0.52366 1.02840 -0.20204

VAR56 0.25677 -1.16621 -2.30918

VAR57 -0.33061 -0.11793 -0.03021

VAR58 1.12087 -0.84994 0.45170

VAR59 0.67426 1.70262 -0.50531

VAR60 -0.08540 -0.41392 0.02630

VAR61 -1.05083 -0.40757 0.35769

VAR62 0.42307 0.23569 -0.23501

VAR63 -0.48777 0.16403 0.15066

VAR64 0.60669 -0.20840 -0.34005

# Inertia and Chi-Square Decomposition

## Singular Principal Chi-

Values Inertias Squares Percents 2 4 6 8 10

-----+-----+-----+-----+-----+-----

0.57552 0.33122 183.166 9.81% \*\*\*\*\*

0.53184 0.28285 156.417 8.37% \*\*\*\*\*

0.52122 0.27167 150.231 8.04% \*\*\*\*\*

0.45754 0.20934 115.766 6.20% \*\*\*\*\*

0.44321 0.19643 108.628 5.82% \*\*\*\*\*

0.42980 0.18472 102.153 5.47% \*\*\*\*\*

0.40289 0.16232 89.762 4.81% \*\*\*\*\*

0.39589 0.15673 86.669 4.64% \*\*\*\*\*

0.37487 0.14053 77.711 4.16% \*\*\*\*\*

0.35698 0. 53.516 2.87% \*\*\*\*\*

0.29832 0.08900 49.215 2.63% \*\*\*\*\*

0.28401 0.08066 44.607 2.39% \*\*\*\*\*

0.27203 0.074012743 70.471 3.77% \*\*\*\*\*

0.35246 0.12423 68.697 3.68% \*\*\*\*\*

0.33445 0.11185 61.856 3.31% \*\*\*\*\*

0.33278 0.11074 61.240 3.28% \*\*\*\*\*

0.32421 0.10511 58.128 3.11% \*\*\*\*\*

0.31109 0.09677 0 40.922 2.19% \*\*\*\*\*

0.25990 0.06755 37.354 2.00% \*\*\*\*\*

0.25555 0.06530 36.114 1.93% \*\*\*\*\*

0.24167 0.05840 32.297 1.73% \*\*\*\*

0.21936 0.04812 26.610 1.42% \*\*\*\*

0.20251 0.04101 22.679 1.21% \*\*\*

0.19934 0.03974 21.974 1.18% \*\*\*

0.18088 0.03272 18.094 0.97% \*\*

0.17394 0.03026 16.731 0.90% \*\*

0.16451 0.02706 14.967 0.80% \*\*

0.15337 0.02352 13.008 0.70% \*\*

0.14224 0.02023 11.188 0.60% \*

0.13551 0.01836 10.155 0.54% \*

0.12360 0.01528 8.449 0.45% \*

0.10834 0.01174 6.491 0.35% \*

0.09451 0.00893 4.939 0.26% \*

0.08578 0.00736 4.070 0.22% \*

0.06689 0.00447 2.474 0.13%

0.04389 0.00193 1.065 0.06%

-----

3.37760 1867.81 (Degrees of Freedom = 2360)

付録5 回答結果(自由回答)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
	母親の精神的負担の軽減	母親が前向きに変化する	母親同士で同じ悩みを共有	教室外での母親同士の交流	母親の気づき・内省	参考・勉強・情報交換	親子関係改善	夫婦関係改善	家族関係改善	母親の行動に変化	子どもの行動に変化	助言が欲しかったという不満	改善方法に関する不満	交通費がかかった	調査結果が知りたい	子どもが前向きに変化する	父親の行動に対する変化	教師・学校に対する不満	子供に友人の支えがあった	教室での失望感	教室で何らかの変化
1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
3	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1
4	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0
5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
6	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
10	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1
11	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
15	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
16	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
17	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
18	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
24	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1
25	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
26	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
27	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
28	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
29	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
30	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
31	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
32	1	0	1	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
33	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
34	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
35	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
36	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
37	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
38	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
39	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
40	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
41	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
42	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
43	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
44	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
45	0	1	1	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
46	1	1	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
47	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
48	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
49	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
50	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
51	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
53	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
54	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
55	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
56	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
57	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
58	0	0	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
59	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
60	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
61	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
62	0	0	1	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
63	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
64	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
65	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
66	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
67	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
68	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	28	10	43	9	19	10	7	6	5	16	22	9	6	1	2	16	5	5	3	3	31

## Column Coordinates

Dim1 Dim2 Dim3

VAR1 0.11983 -0.59330 0.05142

VAR2 0.27837 -0.52549 0.31597

VAR3 -0.43182 -0.09622 -0.13105

VAR4 -2.17118 0.79948 1.59855

VAR5 -0.16527 0.16317 -0.43046

VAR6 0.50385 1.67703 -0.95515

VAR7 0.40762 0.58579 -0.01238

VAR8 0.81648 0.59993 0.82294

VAR9 0.45892 0.32844 0.33090

VAR10 0.36053 -0.18857 0.40188

VAR11 0.58201 0.03184 0.04300

VAR12 -0.948030.66807 -1.58766

VAR13 0.08799 -1.53967 -0.43333

VAR16 -0.31299 -0.64424 -0.22839

VAR17 1.39730 1.38703 1.19578

VAR18 -0.89740 -0.14623 0.06503

VAR21 0.32027 -0.10921 0.07983

# Inertia and Chi-Square Decomposition

## Singular Principal Chi-

Values Inertias Squares Percents 3 6 9 12 15

-----+-----+-----+-----+-----+-----

0.63334 0.40112 94.2621 14.32% \*\*\*\*\*

0.58804 0.34579 81.2615 12.35% \*\*\*\*\*

0.56593 0.32028 75.2652 11.43% \*\*\*\*\*

0.51314 0.26331 61.8776 9.40% \*\*\*\*\*

0.48634 0.23653 55.5836 8.44% \*\*\*\*\*

0.44538 0.19836 46.6146 7.08% \*\*\*\*\*

0.42522 0.18082 42.4916 6.46% \*\*\*\*\*

0.39343 0.15479 36.3752 5.53% \*\*\*\*\*

0.37674 0.14194 33.3549 5.07% \*\*\*\*\*

0.36504 0.13326 31.3153 4.76% \*\*\*\*\*

0.32782 0.10746 25.2541 3.84% \*\*\*\*\*

0.30115 0.09069 21.3122 3.24% \*\*\*\*\*

0.29120 0.08480 19.9279 3.03% \*\*\*\*\*

0.24693 0.06098 14.3295 2.18% \*\*\*\*

0.20721 0.04293 10.0895 1.53% \*\*\*

0.19491 0.03799 8.9277 1.36% \*\*

-----

2.80103 658.243 (Degrees of Freedom = 864)